

Title	デカルト キソクロン ヲ ギジュツ ノ カンテン カ ラ ヨム
Author(s)	モチヅキ, タロウ
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 24 p13-p.25
Issue Date	1990-12
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/11002">https://hdl.handle.net/11094/11002</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# デカルト『規則論』を技術の観点から読む

望 月 太 郎

## 一 デカルトの技術批判

デカルトは旧来の技術を批判することから『規則論』<sup>(1)</sup>を始める。デカルトは技術的な知 *ars* と学知 *scientia* と  
いう二つの知のあり方を比較・対照する。技術は「身体の或る種の使用 *usus* やハビトゥス *habitus*」<sup>(2)</sup>を必要とす  
る」(359, 12-13)。それに対して、学知は「専ら精神による認識 *animi cognitio* に基づいて成立している」(359,  
11-12)。

技術的な知は、第一に、それが差し向けられるところの事物によって即物的に（「事物の相違に応じて *pro di-  
versitate obiectorum*」(360, 4-5)）規定されている。それゆえ、技術的な知は事物の類に応じて区分され、相互  
に何の連関も持たない。第二に、一人の人間が複数の技術に通暁することは困難である。なぜなら、技術的な知の  
本質は、各々の事物がその属する類に応じて主体の側に要求するハビトゥスを体得することのうちに存している  
からである。それゆえ、人は個々の技術を「一つ一つ別々に他のすべてを退けつつ探求すべき」(360, 5-6) なの

ところで、問題は人々がこういう技術的な知と学知とを「誤って関係づけ」(359, 13-14) たことにある、とデカルトは批判する。技術的な知とは対照的に、学知は「どんなに異った主題に應用されても、常に一つであり同じであり」また「ひとつの真理の認識は……他の真理の発見からわれわれを遠ざけるのではなく、むしろそれを助ける」(360, 13-15)。この学知の同一性、相互連関は、その原理をひとえに「人間的知恵 humana sapientia」(360, 8) の不朽の同一性、普遍性に負っている。学知がこの「普遍的知恵 universalis sapientia」(360, 19-20) の同一性ゆえに対象の相違からなんらの差別をも受け取らぬこと、あたかも「太陽の光がそれを照らす事物の多様性からなんらの差別をも受け取らぬのと同様」(360, 11-12) である。

J.-L. マリオンは、この技術的知と学知との比較・対照のうちに、近世哲学の動向を決定するひとつの存在論的差異を読み取る。彼に従えば、<sup>(3)</sup>デカルトが『規則論』冒頭で行っている何気ないこの二つの知のあり方の比較・対照の背後には、何よりもまず第一に、旧来の知の重心を崩そうとする破壊的な意図が秘められているのだという点が察知されるべきである。すなわち、旧来対象の本性を類的によく定義することのうちにその本質を有していた学知の理念は無効とされる。学知の厳密さを規定するのはむしろ、対象を認識する主体つまりは精神のあり方である。この対象―主体の認識論的関係の逆転は、それを支える存在論的枠組の更新を含蓄する。すなわち、旧来の学知のレフェランスであったアリストテレスの実体はその存在論的な価値を失い、代わって自己の要求するとおりの対象のみを対象として立てる主体すなわち精神の働きが唯一実在を意味づける拠り所となる。こうして「専ら精神による認識において成立している学知」は、ひとつの新たな存在論、旧来のいわば道具―技術的な様式とはまったく異

なる新たな「存在者へと接近する通路の適切な様式」<sup>(4)</sup>を準備する。

規則1における技術／学知の比較・対照が既に心身二元論の定立をもその射程のうちに収めていることも指摘しておこう。学知は精神の認識の働きにおいてのみ成立している。これに対して、技術は通常身体器官の働きに多くを負っている。デカルトは、「*L*」バックも言うように<sup>(5)</sup>、「常に一にして同」なる「認識の力 *vis cognoscens*」(415, 251-23)とあらゆる身体的諸能力とを区別し、この心身の区別の上に学知と技術との差異を基礎づけようとしたのである。

ところで、この学知の同一性、汎通性を支えているのは、原理的には確かに「認識の力」の同一性に支えられた「知恵」の同一性、普遍性であろう。だが、規則1でやや抽象的な仕方です示されたこの一なる知恵の理念は、後により具体的な仕方です、この知恵を支えている「知能 *ingenium*」の働きの研究として深められてゆく。その働きの有り様は、「慧眼 *perspicacitas*」や「俊敏 *sagacitas*」といったきわめて実際的な能力の展開として示される。

そこではかの知恵とはこれらの能力の働きの総体のことであり、学知とはそれらの織り成す連鎖にほかならないことが示される。方法がこれらの能力の用い方を教示する。この方法の習得はきわめて技術的なものである。われわれは『規則論』においては学知がかように実際の人間の能力の展開として示されていること、そしてこの展開の仕方が「技術」の名の下において示されていることに目を向けよう。

デカルトは実際「方法 *methodus*」という語をしばしば「技術 *ars*」という語で置き換えている。これは些細なことではないように思われる。それはデカルトのテキストを通じて頻出する技術家の喩えからも明らかである。かように技術的なものが、自然学であれ形而上学であれ、デカルト的学知を背後から支えているという事実、そして

既存の存在論的枠組の更新や心身二元論の定立を導くこの学知の確立の陰に或る技術概念の革新があったという点はいくら強調しても強調しすぎではなからう。ところで、われわれの課題は、この新たな技術概念の成立地点を標定し、またデカルトが批判する旧来の技術と方法の技術性との間の距離を測定することである。

## 二 技術としての方法とその実践的性格

デカルトは方法をきわめて実践的な知の様式として理解していた。「実践的な……」と言うのには、いくつかの理由がある。とりわけまず、彼の提唱する学知に到るための方法が知能をその獲得へ向けて技術的に訓練することを主体に要求するものであったという点。本論ではこの点を集中的に論ずることにする。デカルトは繰り返し方法の実際の行使と練習の必要性を説いている（規則9～11）。慣れ親しむこと、練習することが方法を介して学知に到るうえで本質的である。

方法は直観 *intuitus*、演繹 *deductio*、枚挙 *enumeratio* という三つの操作から成る。これらについては従来多くの論考が施されているのでここでは論じない。ただ次の点だけを指摘しておこう。規則7の末尾でデカルトは、「なお、これら上の三つの規則「直観、演繹、枚挙」に関する規則5、6、7は分離されるべきではない、というのも大抵の場合これらを同時に配慮すべきであり、またそれらすべてが協働することによって方法は完全なものとなるからである」（392, 1-4）と述べている。方法は一つの全体的過程として習得されなければならない。このデカルトのことに鑑みても、われわれは直観、演繹、枚挙の一々の操作的技法を個別的に研究するにもまして、それらを総括的に一つの技術として捉えその全体像を明らかにする必要がある。そして、そのことに関してデカル

ト自身が自らの知見を示しているのが、規則9、10、そして就中規則11である。

規則9以降の主題は「いかなる努力・手段 *industria* によってわれわれは直観と演繹を実行するのにより巧みな者となり得るか」(400, 19-20)である。デカルトはまず第一に「知能の二つの主要な能力」(400, 20-21)である

「慧眼 *perspicacitas*」と「俊敏や *sagacitas*」とを涵養すべきことを説く(規則9)。直観や演繹が「知性の働き *intellectus actiones*」(368, 9)と言われていたのに対して、慧眼や俊敏さは「知能の能力 *ingenij facultates*」(400, 21)とあるとされている点にも注意を払っておきたい。知性の働きとしての直観や演繹の働きは、慣れ親しむこと、練習することを通して引き出され増し加えられるべき慧眼や俊敏さといった能力に依存している。またそこに知能の能力としての慧眼や俊敏さを論じることの意味がある。「知能 *ingenium*」とは実際かような諸能力を外延とする概念であると同時に、またそれ自体それら諸々の能力を統べるような共通的な能力として実在する。それは精神 *mens* とは区別して考察されるべきものである。

デカルトは直観の慧眼をいかにして獲得すべきかを説きつつ、それを技術家の修練と比較して次のように言う。「細かな仕事において訓練され、視力を一々の点に注意深く向けるのに慣れた技術家は、どんなに小さく繊細なものでも完全に識別する能力を、使用することによって獲得する。」(401, 37)「だからすべての人々は、一度にほんの少しの、そしてごく単純なものを思惟によって捉えることに……慣れ親しまなければならぬ……。技術と練習とによってはるかに多く知能はこのことに巧みたらしめられる……。」(401, 27-402, 4) 慧眼はこうして技術と練習とを通して獲得される。「自然の光」は本有的なものであろう。しかし、それを増強するも減衰するも「人間の努

ところで、デカルトがこの慧眼の獲得について、それが生れつきの素質或いは個人的な傾向性のみ左右されるようなものではないと考えている点が重要である。第一に、生具の素質によってよりも「技術と練習とによってはるかに多く知能はこのことに巧みたらしめられる」。第二に、「すべての人々」がそういう修練を積むべきだ、とデカルトが言っている点に注意しよう。デカルトにとって学知は、少なくとも『規則論』に従う限り、万人に権利上平等に客観的な仕方ですべて所有されるべきものである。規則2において、デカルトは人間知能の達し得る限りでの「確實にして不可疑な認識」(362, 2)の基準を示して、「数論と幾何学の証明に等しい確實性を獲得できないようないかなる対象にも携わるべきではない」(366, 7-9)旨を説いている。なぜなら、それら数論と幾何学は「かくも純粹かつ單純な対象を取り扱い、経験がそれを不確實にするようなものを前提にすることはまったくないほどであり、……それゆえにそれらはあらゆる学問領域中でも最も容易かつ透明 *faciles & perspicuae* であり、われわれが要求するとおりの対象をもっている」(365, 16-21)からである。この基準を満たさないような、すなわち数学的对象と同程度の容易さと透明さを持たないようなあらゆる経験は、学知の領域から排除されて然るべきである。しかし、このことは、逆に見れば、これほど「容易かつ透明」な対象を見通せないような知能はまず鍛えられねばならないという主張をも含んでいるように思われる。直観の慧眼はともあれこの基準を満たしていなければならぬのである。よって、すべての個人的な傾向性はそこに到るまでなんらかの「努力・手段」をもって止揚されなければならない。そして、その結果はじめて学知の客観性が現実に基礎づけられるのである。

俊敏さも、また技術的修練を経て高められる(規則10)。俊敏さとは、「一つの真理を他の真理からより巧みに演繹する」(405, 22-23)能力である。この能力は第一に演繹に、第二に枚举に関わる。

デカルト自身は、自分自身に「生具の俊敏を *ingenita sagacitas*」(403, 19)を「自らの努力によって *propria industria*」(403, 14)増し加え、より大いなる俊敏さを獲得してきたと告白している。俊敏さは、かように一面においては生得的な能力の一つであり、それによって方法に導かれた経験・実験 *experientia* が可能になる。「自らの努力によって」「試してみること」(403, 18)が経験・実験の本質である。デカルトは次のように言っている。「このことが何度も成功したので、私はついに次のことを認めるようになったのである。すなわち、私は、他の人たちがそうしているように、技術というよりも偶然に力を借りた、不規則で盲目的探求によって事物の真理に到達するのではなく、真理の発見を少なからず助けてくれるいくつかの確実な規則を長い経験・実験 *experientia* によって覚知し、その後それらを多くの事柄に応用したのだということ。そして、こういうわけでこの方法のすべてを注意深く涵養し、私自身もまたすべてのうちで最も有効な研究方法に初めから従ってきたのである。」(403, 21-404, 4) 経験・実験することと技術との不可分の結びつき、このことについて右のデカルトの記述ほど深く語るものはない。<sup>(7)</sup>

しかし、すべての人がそういう仕方では真理探求の技術を自ら開発し、経験・実験を増し加えてゆくことができるわけではない。「すべての人が物事を独力で探求することへと、自然によって傾向づけられているわけではない。」(404, 5-6) そこで、デカルトは、場合によっては既成の「何かのきわめて軽微で単純な技術……例えば、布や敷物を織る職人の技術、或いは編物をしたり、限りなく様々な模様を織り成す刺繍をしたりする婦人の技術、そして同様にすべての数の遊技や数論に属する事柄等」(404, 8-14)を学ぶことから始めることを提案する。デカルトがここで織物や編物等の職人的技術と数の遊技とを同時に扱っているのは、それらがみな「そこにあつては順序 *ordo*

が続べている」(404, 10) ような技術だからである。これらの技術を学ぶことを通して、人はより一般的に順序の立て方を会得するようになる。そこにこれらの技術を学ぶことの有用性のすべてがある。この意味で、それらは「かくも驚くほど知能を錬磨する」(404, 15) のである。

デカルトにとって、知能は錬磨されるべきものである。確かに一面においては「生具の俊敏さ」というものがある。しかし反面、すべての人がそれをよく用いることへと自然によって傾向づけられているわけではない。自然によって傾向づけられていないのなら、人為によって、人間的な「努力・手段」によって傾向づけなければならない。ここに技術が登場する余地が生ずる。技術とは、身体的にであれ精神的にであれ、主体をなんらかの仕方では人為的に傾向づけるものである。精神としての主体をあらゆる努力・手段を援用して方法的探求へと傾向づけること、或いはかように傾向づけられ得るものとしての「知能 *ingenium*」の有り様を具体的に示すこと、これが『規則論』の最大の関心事である。

ところで、先の引用中に挙げられている「限りなく様々な模様を織り成す刺繡」の例は無為に選ばれたものではない。マリオンが指摘しているように<sup>(8)</sup> この「刺繡 *textura*」という語は方法的推論の「連鎖 *contextus*」(*consequentiarum contextus*: 383, 24; 387, 18) という語と相呼応しているとも考えられる。刺繡といえども、それは優れて順序が続べているような技術である。かような職人的技術はやはり規則1で批判されたような「身体の或る種の使用やハビトゥスを必要とする」技術に属している。この種の技術に関しては、身体が或る道具の使用に向けて傾向づけられていること、例えば耕作ならば手が鋤に、琴の演奏ならば琴という楽器に向けて傾向づけられていることが肝心である。人は天賦の、或いは熟練によって得られる「身体のハビトゥス」のおかげでそういう傾向

性を保持することができる。だが、道具の使用に条件づけられたこの種の技術は相互になんの汎通性も持たない。なぜなら、一つの身体のハビトゥスは他のそれとは何の連関も持ち得ないからである。しかし、デカルトがこの例から引き出そうとしているのは、そういう身体のハビトゥスには縛られない、いかなる対象にも応用可能な「順序 *ordo*」以外ではない。この順序を汎通的に使用する術、そういう技術としてデカルトは方法を構想した。方法とは、それを順序が統べるものである限りの技術のエッセンスであるが、それはさらにあらゆる「身体のハビトゥス」から解放されたときはじめて真の意味で「限りなく様々な」展開を期待し得るものとなるのである。

さて、以上われわれは規則 9、10 においては、規則 1 において批判されたような技術がまったく切り捨てられているわけではなく、むしろ場合によっては知能を陶冶するに有効なものとして再評価されているのを検証してきた。以下、問題点を整理しつつ、デカルトがそこから引き出した方法的技术の特徴を明らかにしてゆこう。

### 三 結 び

方法は、それがなんら身体器官の働きには依存せず、良識を備える者なら「誰でも *quicumque*」(371, 26) 用いることができるという点では、旧来の職人的技術とは全然異なる。が、他方、先に見てきたように、それがその使用法を会得するために主体に不断の修練を要求するという点では、やはり技術的なものである。それは知能を修練によって錬磨し、より大いなる慧眼や俊敏さを獲得することによってのみ実効的なものとなる。いずれの技術の場合においても本質的なのは、身体器官或いは知能がその使用に向けて「傾向づけられて *propensum* いる」ことである。身体的技術の場合、この傾向づけを可能にし維持しているのは「身体のハビトゥス *habitus corporis*」であ

る。しかし、この「身体のハビトゥス」は反面、獲得された技術の汎通的使用を妨げている。方法的技術の場合、そのような傾向づけを可能にし維持しているのは一体何か。そこには、デカルトはそういう用語を用いてはいないが、やはり「知能のハビトゥス *habitus ingenii*」の「ところ」が想定されているのだろうか。

このいわば「知能のハビトゥス」を準備するのが、こと直観に関する場合「自然の光」であり、また演繹や枚挙に関する場合「生具の俊敏さ」であろう。これらが知能を直観、演繹、枚挙等の操作的技法の行使へ向けて主体を根源的に傾向づけている。この点が第一に見逃されてはならない。ただし、それらは「努力・手段 *industria*」を通して「開発 *excolere* され」(373, 23, etc.) なければならぬ。この「努力・手段」は場合によっては「自らの努力 *Propria industria*」すなわち意志である。技術はかく意志的に実現する。

方法的技術の意志依存的性格はまた別な意味においても重要な特徴である。次のような一節がある。「ところで、枚挙されるべき事物のこの順序 *ordo* は、大抵の場合多様であり得、それゆえ各人の意志 *uniuscuiusque arbitrium* に依存している。」(391, 12-13) さらに続けて、「この順序をより鋭く考え出す *excogitare* ために」……複雑で不透明な命題を段階的により単純なものに還元し、その後あらゆるものうちでも最も単純な直観から他のすべてのものの認識へと同じ段階を経て昇るべく努力する」(391, 14; 379, 17-21) ことが肝要だとデカルトは説いている。順序の設定は、一面では全く個人の意志的選択に依存している。それは恣意的に考え出されたもの *excogitatum*、すなわち主体の自由な意志の発露である。しかし、それは他面、より透明なものへと純化されなければならない。そうされることによって、順序は客観性を獲得するのである。この純化の努力のうちにこそ「人間の努力の核心 *humanae industriae summa*」(379, 22) が存するとデカルトは言っている。或いはそこにこそ「すべての技術の

秘密が存する」(382, 17)とも言っている。こうしてみると、「人間の努力」とはたんに個人的な意志の発露を越えた、むしろそういう個人的な傾向性を矯正する外的な「手段」であり、そこへ個々人の意志が合わせられてゆくべきものであろうことが見えてくる。そして、この「努力・手段」が「技術」であり、その果てに学知の客観性が現実化し得るのだということも。しかし、かような「努力・手段」を促しているのは、一体何か。

第二に、デカルトが、直観や演繹、枚举が「一つに融合する」(408, 15)ことのできる能力であるとしている(規則11)点が見逃されてはならない。これらの働きの融合可能性は知能の統一性に依っている。デカルトはこの融合の効用として、「問題としている結論をより確実に認識する」のに役立つのみならず、それによって「知能が他の物事を発見するのにより巧みたらしめられる」(408, 19-21)ことを挙げている。後者が特に重要である。「一々のものを注意深く直観しつつ同時に他のものへと移行してゆく或る種の思惟の運動」(408, 16-17)は、一つの推論を他の推論へと拡大し、延いては「知能の把握力 *ingenij capacitas*」(407, 7)を特定の対象に限定されない無限に適用可能なものにする。この「思惟の運動」の連続性が、知能が特定の思考パターン(＝ハビトゥス)を打破することを可能にし、方法的技術の無限の発展の可能性を保証し、さらにはその汎通性を実現している。ここにデカルトが「知能のハビトゥス」という言葉を用いない所以があるように思われる。「自然の光」や「生具の俊敏さ」はこの「思惟の運動」のおかげで特定の習慣に固定化されることなく自由に柔軟に発展し得る。そして、それゆえ方法的技術は「無数の技術の発明」(DM, VI, 62, 9)を導くのである。

最後に、知能は想像力や感覚や記憶といった身体に依存するような諸能力をもそれ自身の内に取り込み、それらを援用して発展してゆき得る程までに柔軟な能力である(規則12)。重要な点は、これら想像力や感覚や記憶がそれ

ら自体において自立したものとしてではなく、「常に一にして同」なる「認識の力」と協働する限りのものとして捉えられていることである。それらは共に「共通感覚 *sensus communis*」(415, 28)に働きかけ、そこで知性の働きと融合し「かの同一の力 *eadem vis*」(416, 3)を形成する。心身結合である。かような心身結合が身体的諸能力をそれら固有の「身体のハビトゥス」から開放し、また知能が環境からの働きかけに応答することを可能にしている。こういう仕方では『規則論』において既に原理上の心身分離と事実上の心身結合とが同時に定立されている点は注目に値する。そして、こうして「身体のハビトゥス」から開放された技術は、環境に対してきわめて操作的に作用してゆくことができるようになるのである。

## 注

(1) 正しくは『知能指導のための諸規則』(*Regulae ad directionem ingenii*)であるが『規則論』と略記。同書からの引用はA1版全集第十巻により本文中にその箇所を頁数・行数の順に示す。他のデカルトの著作からの引用も同全集により慣例に倣い本文中にその箇所を示す。「知能」という訳語については所載章氏に従った。

(2) このハビトゥスの概念をここでひとくちにとまめることは難しいが、簡単に触れておくならば、それは、精神のたれ身体であれ、特定の技法・技術を習得するために必要とされるような布置 *disposition* のことである。この概念はたんに「素質」とか「習慣」とかの日本語をもっては訳し切れない広さと深さを持つ。それは使用・熟練によって後天的に獲得されるという点では「習慣」のようなものであるが、他方主体をその技術の使用に向けて根源的に傾向づけるものであるという点では「素質」のようなものである。なお、この点については J.-L. Marion-〔1〕 *Regles Utiles et Claires pour la Direction de l'Esprit en la Recherche de la Verité*, Traduction et annotation, Martinus Nijhoff, 1977, pp. 89-91 を参照。

(3) J.-L. Marion-〔2〕 *Sur l'ontologie grise de Descartes*, Vrin, 1981, p. 21.

- (4) M. Heidegger, *Sein und Zeit*, § 21, Max Niemeyer, 1986, S. 95, 『存在と時間』第一部第一篇第三章第二十一節、原佑・渡辺二郎訳、中央公論社『世界の名著』ハインリッヒ『一九六頁』参照。
- (5) L.-J. Beck, *The Method of Descartes*, Oxford University Press, 1952, p. 22 sq.
- (6) 『方法序説』へはまた別の見解が示されつつあるように思われる。cf. DM, VI, 15, 26-31.
- (7) この記述の示すプロセスを図式化しておく。 「自然の光」・「生具の俊敏さ」による根源的な傾向付け↓「自らの努力 propria industria」によるその補強→experientia (≡覚知、体得とこの experientia (≡経験)→技術(規則)の実現→experientia (≡応用とこの experientia (≡実験)→反復…とこのことにならぬ。
- (8) J.-L. Marion, *op. cit.* -[1], p. 215.

(大学院後期課程学生)